かるた部顧問と結婚したい。

ソウルディーラー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

チートをもらって転生したオリ主は富士崎高校に入学し、かるた部顧問・桜沢翠に恋をした。

彼はリア充としての生き方を捨て、彼女を振り向かせるためにかるた部に入部する。

「桜沢先生、好きです!!!」『腕立て伏せ１０セット追加』

目次

第1首　出会い　1
第2首　自称親友　5
第3首　才能　9
第4首　飛躍　13
第5首　実力発揮　19
第6首　全国大会　27
第7首　瑞沢高校　31
第8首　決着　36
第9首　課題発見　41
第10首　合宿　45
第11首　強化　54
第12首　成果　58
第13首　相談　64

第1首　出会い

□滝野亮

転生特典をもらって生まれ、早１６年。

二度目の人生を要領よく生きてきた俺は地元の進学校『富士崎高校』に進学した。

（部活どうしようかな…。中学みたいに運動部で無双してやるか）

今は部活動説明会の真っ最中だ。

『…そんな訳で、英語が好きな子、スピーチが好きな子、大歓迎！一緒にＥＳＳ部で頑張ろう！』

『ＥＳＳ部のみなさん、ありがとうございました。続きましてかるた部のみなさん、お願いします』

「かるた部？」

珍しい部活につい声を上げると、近くの女子が耳聡く反応する。

「滝野くん、知らないのぉ～？富士崎のかるた部ってめっちゃ強いらしいよぉ～。去年も全国大会で優勝したんだってぇ～」

「へえ、そうなんだ。すごいな」

転生者のテンプレに則りイケメン（自画自賛）な俺は、女子にモテる。

かるた部の部員たちが壇上に上がっていく。顧問とおぼしき先生がマイクを持ち話し始める。

『顧問の桜沢です。本校のかるた部は５０年以上の歴史を持ち、去年の全国大会では４連覇を達成しました。これもひとえに部員の…』

「わぁ、美人な先生～。ねぇ、滝野くん。あの先生びじ…」

女子生徒Ａが急に静かになる。俺が口を塞いだのだ。

「ひゃ、ひゃひのふん？」「黙れ」「んぶっ」

息ができず苦しそうな女子生徒。だがそんなことはどうでも良い。かるた部の生徒が試合のデモンストレーションを始める。それもどうでもいい。

俺の目はかるた部の紹介を続ける先生に釘付けになっていた。

「……女神」

こうして、１人のオリ主がかるた部に入部したのだった。

◆

□桜沢翠

（さて、今年の入部者にはどんな子がいるのかしら）

桜沢翠は、集まった仮入部届けを職員室でチェックしていた。

かるた部顧問である彼女は、３０枚近くあるそれに眉一つ動かさない。

現在のかるた部の部員数は３年１５人、２年１８人。それだけ聞くと今年は例年より多いと考えられるが、あくまで仮入部員数だ。

仮入部期間にハードな練習を体験し、毎年１０人以上が本入部しない。

つまり例年通りの部員数だと言える。

問題は経験者の人数だ。競技かるたはマイナーな競技で、強豪校といえど初めから経験者な人間は少ない。ほとんどが初心者だ。

（林田さん、日向くんがD級…山城さん、この子はC級ね）

（町田くん、滝野くん…滝野くん？この子どこかで…　！思い出したわ。確かバスケ部顧問の谷先生が言ってた。中学時代、すごい成績を残したバスケ選手だったって…バスケ部に入ってくれれば即戦力だって喜んでたのに、なぜうちの部に？）

彼女の疑問が晴れることはない。自分に一目惚れしたからなどとだれが予想できるのか。

◆

□滝野亮

仮入部期間が終わり、残った生徒は本入部となる。

武道場に集められた本入部者１７人の中には、当然俺もいる。

「では、入部した1年生には自己紹介をしてもらいます」

（あああああああああああああああ、桜沢先生…好きだ!!!大好きだ!!!ぷっくりとした唇が、涼やかな目が、ショートカットの髪が、凛々しい声が、引き締まった肉体が、すらりとした足が…）

「滝野くん！聞いてるの!?あなたで最後よ！」

「ハッ！」

クスクスと笑われる。恥をかいてしまった。桜沢先生を待たせる訳にはいかないので、素早く立ち上がる。

「1年B組、滝野亮です。中学時代はバスケ部でした。かるたは初心者です。」
「自己紹介も終わったところで…「好きな人は桜沢先生です!!!よろしくお願いします!!!」
「校庭10周してきなさい」

第2首　自称親友

□滝野亮

本当に10周走らされた後武道場に戻ると、他の1年生は素振りを始めていた。

「滝野くん、ランニングはもう終わったの？」

「はい!!」

「じゃ、ストレッチした後素振りに混ざって。ストレッチの仕方は仮入部中に教えたでしょ？」

「分かりました!!」

それだけ言うと先生は、他の1年生の指導に戻っていった。

先生の声を聞くだけで幸せな気持ちになる。やはり女神（確信）。

先生と話している間、メガネの先輩がずっとこちらを睨んできていた。なんだったんだろう？ちなみに今日の1年生は2、3年生と一緒のメニューで練習する。

30分のストレッチが終わった俺は他に混じって素振りをし、それも終わったところで先生が集合をかける。

「ウォームアップは終わったわね。では、1年生同士で試合をしてもらいます。」

（これから試合!?）（既にヘトヘトですけど!?）

他の1年の声にならない叫びが聞こえる。しかし俺は動じない。先生にやれと言われればなんでもやる、それが愛。

「まだ百首覚えていない人もいるかもしれないけど、試合の流れを覚えるためよ。対戦相手を確認し、札を並べて暗記を始めなさい」

先生の有無を言わせぬ口ぶりに、他の1年生も覚悟を決めたようだ。対戦相手の確認に行っている。あ、俺も確認しなきゃ。

２試合と３０分のストレッチを行い、すっかり陽が暮れてからこの日の練習は終わった。

◆

なかなかハードな練習だったな。俺は元運動部だし、文化部の練習なんて余裕だと思ってたが……

「意外とキツかった」

「いや、ホントそうだよね！超キツい！」

独り言に返答されたことに驚いて振り向くと、やたら髪にパーマのかかった男子生徒がいた。

「…誰？」

「君と同じかるた部1年、日向良彦！ヨロシク!!」

「あ、ああ…よろしく」

「ていうなひどいよ滝野くん！自己紹介しただろ！」

「先生のことで頭が一杯だった」

正直に言うと、ヨロシク男は納得顔になった。

「滝野くん桜沢先生好きなんだもんね！凄かったもんね、自己紹介！」

「まあな」

「分かるよ、だって桜沢先生ってびじ「お前も先生が好きなのか!?」

だとすればライバルだ。負ける訳にはいかない。
ヨロシク男は急変した俺の態度にびっくりしたようだ。慌てて否定してくる。

「いやいや俺は同年代の子にモテたいから！」
「そうか」

よかった。ライバルではなかったようだ。

「って訳でさ、女の子紹介してくれよ滝野くん！」
「どういう訳だ」
「だって滝野くんモテそうじゃん！イケメンだし！ぶっちゃけそのために声かけた！」

下心丸出しか、こいつ。

「まあ、女友達は多いけど」
「よし！これからヨロシク!!親友!!」
「誰が親友だ」

◆

□桜沢翠
桜沢翠は今日の試合で確認した、1年生の実力について考えていた。

この代は山城さんが一番良いわね。2年生の下位と試合させても良い勝負をしていた。他にも小粒だけど数人。あと気になるのは…

1人、頭に思い浮かぶ。
滝野亮。いきなり教師に告白してくるという非常識な自己紹介には驚いたが、試合ではそれ以上に驚かされた。
（彼は一体何者なの？）
試合中の彼の姿勢、手の位置、膝の位置、札の払い方、押さえ方、拾い方…何から何まで自分にそっくりだったのだから。

第3首　才能

□滝野亮
「お疲れ～」「今日もきつかった～」

本入部から数日が経ち、新入部員が練習に慣れ始めた頃。
練習後のストレッチを終えてさあ帰ろうというところで、俺にとっての大事件が起こった。

「滝野くん、この後時間ある？」
「はい、喜んで!!!」

女神からお誘いがあったのだ。天にも昇る気持ちというのはこういうことを言うのだろう。またメガネの先輩に睨まれているが、今はどうでもいい。

「滝野ー帰ろうぜー」
「悪いな日向、俺はこれから桜沢先生との愛を育む」
「おお、やったじゃん！」
「少し居残ってもらうだけよ。早く来なさい」

ここ数日で距離の縮まった親友（仮）に別れを告げ、先生と職員室に向かう。

「座って頂戴」「はい、失礼します!!!」
「…その私と話すときだけ大きな声を出すのを止めなさい。うるさいわ」
「す、すみません。愛が溢れてしまって」

俺がそう言うと、先生はため息をついて額を押さえる。

（それにしてもどうしたのだろう、俺だけを呼び出すなんて。ハッ！まさか愛の告白？やっと俺の気持ちに応えてくれるのか！）

「俺、先生のこと一生大切にします!!」

「…なんでそうなるのよ。あとうるさいわ。あなたに残ってもらったのは、聞きたいことがあったからよ」

「聞きたいこと？」

先生が聞きたいことは、どうやら練習中の俺の動きについてらしい。

「暗記や送り札といったプレイは初心者相応の実力なのに、囲い手や渡り手はまるで何年もかるたを続けている上級者のそれ…そのアンバランスさの秘密が知りたいの」

知りたい…？先生が俺のことを知りたい…!?

「それは愛の告白ですか!?先生!!?」

「質問に答えなさい。話が進まないわ」

おっと、先生に急かされては話さないわけにいかない。二度目の人生を始めてから誰にも話さなかったことだが、先生の質問に答えないという選択肢はあり得ない。

「俺、見た動きを模倣できるんです。生まれつきなんですけど」

嘘だ。生まれつきというか、転生特典でそういう能力をもらった。けど転生なんてファンタジー、信じてもらえそうにないしな。しようがない。

「……」

先生が黙ってしまった。嘘がバレたか？いや、そんな感じじゃない。眉間に皺を寄せてじっと考え込んでいる。そんな姿も美しい。

「信じ難いけど…実際に私の動きを再現してるところを練習で見てるからね。」

納得してくれたようだ。

「あなたにそんな能力があるとして…どうしてかるたなの？かるたは技術だけでは勝てない。他のスポーツ、それこそ中学時代にやってたバスケみたいな競技のほうが活躍できるんじゃないの？」

「何度も言ってるでしょう。俺は先生が好きなんです!!先生に少しでも近づくためにかるた部に入ったんです!!」

中学時代、相手選手の技を丸パクリしまくるリアル黒子のバスケも楽しかったが、桜沢先生の傍にいられることのほうがずっと楽しい。

またため息をつき、額を押さえる先生。体調が悪いのかな？

◆

□桜沢翠

滝野くんを帰らせ、1人になった私は考えていた。

（驚いたわね。確かにそんな能力があれば、彼のちぐはぐな上手さにも辻褄が合う。けど、彼に言った通りかるたはそれだけでは勝てないわ。『心・技・体』全てが強くなければ）

（けど大きなアドバンテージであることは確か。人の動きを見ただけでＡ級レベルの技術を手に入れられる才能。あとは心と体、つまり

頭脳戦とフィジカル、それが手に入れられれば、彼は……）

富士崎かるた部の顧問になって11年、こんな歪な才能には出会ったことがなかった。彼を3年間育て上げたら、一体どんな選手になるのか。ただ技術だけが突出した選手で終わるのか、それともかるた界に名を残すような偉大な選手になるのか。彼の行く末を見てみたいと思った。

（とりあえず自陣の暗記から徹底させましょう）

技術以外は完全に初心者なのだから。

第４首　飛躍

□滝野亮

６月下旬、俺たち富士崎かるた部は第○回椿杯争奪全国競技かるた大会に参加するため、宮城県に来ていた。この大会はＡ級からＣ級まで参加できるため、部員５０人の内半数以上がここにいるのだ。

そして俺はＣ級で参加する。そう、Ｃ級。なぜ入部から２ヶ月ちょっとで２つも昇級できているのか。富士崎かるた部では４月下旬から５月下旬にかけ、計２回の遠征が行われる。どちらもＡ級からＥ級まで参加でき、部員全員が参加できる大会だ。そこで入賞したのだ。俺のように入賞してＣ級以上に上がった者、または元からＣ級以上の者がこの大会に参加するのだ。１年生からは４人が参加。俺もその内の１人だ。

「お互い頑張ろうな、滝野！万が一当たったらヨロシク!!」

「ああ」

それとヨロシク男こと日向もＣ級に上がってきた。

「お前、意外と強かったんだな」

「ひどいな、俺経験者だぞ？入学したとき既にＤ級だったんだぞ？」

「というか、俺には滝野がＣ級に上がれたことのほうが意外だよ！急にやる気出し始めたもんな！５月くらいだっけ？」

よく見てるな、こいつ。確かに俺は最初、桜沢先生と一緒に居れさえすれば良かった。それで満足だったし、上昇志向みたいなものも無かった。しかし、そんな俺を大きく変える出来事が起こったのだ。そう……

「桜沢先生のおかげだよ」

「だと思った。滝野だもんな」

◆

5月上旬

「滝野くん、この後残れる？大事な話があるから部室に来て欲しいのだけど」

その日の練習が終わり、さあ帰ろうかというところで桜沢先生に声をかけられた。あれ、デシャヴ？

「はい!!!」

大事な話か、何だろう。ハッ！まさか婚約…!?急いで向かわねば!!この世の終わりみたいな顔をしてるメガネの先輩のことなどどうでもいい。勢いよく部室の扉を開け、先生の机に向かう。

「先生!!!婚約指輪はティファニーとかどうでしょう!!!」

「何の話をしてるのかまったく分からないわ。後うるさい」

「すいません」

どうやら婚約では無かったようだ。

「改めてD級昇級おめでとう」

「ありがとうございます。先生のご指導のおかげです」

先生は俺の目を真っ直ぐ見て言った。

「単刀直入に言うわ。あなたには7月までにB級に上がってもらいたいの。そうすれば私はあなたを7月の団体戦の登録選手にするつ

もりよ」

「へ？」

何を言われたのか分からなかった。俺は先生へ愛を伝えるためなら常識など投げ捨てるが、そもそもの自分は常識人だと思っている。日向には思いっきり否定されたが。

そんな常識人の俺からすれば、かるた歴1ヶ月の初心者を名門・富士崎かるた部の登録選手にするということがいかに無茶なことか分かる。

登録選手の枠は8人しかなく、戦力外の人間を入れる余裕はない。ほとんどが3年生で構成され、来年に備えて下級生を入れるとしても2年生だろう。ましてや今の2年生は黄金世代と呼ばれ、既にA級が3人いるのだ。あのメガネの先輩もその1人だった。

これがバスケだったらまた違ったのだろうが、この1ヶ月で俺の思っていた以上にかるたは難しいということが分かった。最強の挑戦者と呼ばれていた桜沢先生の動きを完璧に模倣しても、それだけでは勝てないのだ。毎日定位置や暗記・送り札や札の移動などの練習をしているが、まだまだ初心者の域を出ない。C級にもなれるかどうか。

「先生、俺……」

無理です。そう言おうとしたとき、先生が俺の手をぎゅっと握ってきた。

先生は…いや女神は、俺の手を握ったままこう言った。

「私は『あなたならできる』と思ってるわ」

鼓動がどんどん速くなる。部活のランニング後だってこんなに速くない。顔が熱い。多分真っ赤になっているだろう。
先生が俺に期待している。３年生でも黄金世代の２年生でもなく、この俺に。

「～～～っ!!俺、やります!!!B級になります!!!」

◆

再び６月下旬
ああ、今でも鮮明に思い出せる、先生の手の感触。柔らかくて、温かくて…

「おーい、滝野?どうした?戻ってこーい」

日向が何か言ってるが、幸せマックスな俺には聞こえない。

「そこ、滝野くんと日向くん!他の部員はもう会場に入ってるわよ!早くしなさい!」

おっと先生に呼ばれた。行かねば。

「何やってるんだ日向。ちんたらするな、早く行くぞ」
「ええ…　理不尽…」

◆

一回戦の組分けが終わった。俺は対戦相手を確認し試合に向かう。

「滝野くん」

「っ！桜沢先生！」

振り向くとそこに女神がいた。

「先生、俺の試合を見に来てくれたんですか!?」

「いえすぐＡ級の会場に行くわ。」

残念。一瞬期待させられた分ショックが大きい。

「そんなにがっかりしない。それに決勝は全部の級が同じ会場なんだもの、観戦できるわ」

俺が決勝まで行くことを前提にした励まし。その言葉で緊張が高まる。

「あなたならできるわ。頑張りなさい」

「はい!!!」

「だからそれがうるさいのよ…」

緊張する。けどそれ以上に燃えている。桜沢先生の期待に応えたい。

「おっ、滝野いた！もう一回戦始まるぞ！」

「おう」

◆

□桜沢翠

試合に向かう教え子たちの背中を見ながら、彼にやる気を出させた日のことを思い出す。

手を握って真摯に励ます。それであの単純な1年生は自信をつけてくれると思ったのだ。それは正しかった。あと気がかりなのは、自分がとった指導方法が正しかったのかということのみ。

『感じ頼みでないかるた』の最高峰、若宮詩暢の模倣をさせるという方法が。

第５首　実力発揮

□滝野亮

「暗記時間は今から４５分までです。始めてください」

「よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

どれだけできるだろう、先生に教わったこと。そして先生に見せてもらった、若宮クイーンの映像の模倣。

できたら誉めてくれるだろうか。

◆

「時間です」

「難波津に　咲くやこの花　冬ごもり…

（集中だ。暗記は…できてる。手の位置、膝の位置…大丈夫。後は…）

『クイーンの強さは全方位の札への圧倒的な速さと、札際を払う無音の払い手・とても上手い囲い手。前者は模倣じゃどうにもならない。あなたは後者を目指しなさい。それだけで武器になるわ。』

それが先生の助言。

…るべと咲くやこの花　今を春べと咲くやこの花」

「し『の』ぶれど」

（取った！）

自陣左下段の二字決まり。しかも「しのぶれど」。

クイーンの得意札だ。映像でもこの札を取るクイーンを何十回と見た。もはや俺にとっての得意札でもある。
相手が呆然としている。俺の取りの速さに驚いたのか、俺の払い手があまりに静かで札際を的確に払ったものだったからか。

取りが速かったのは先生のおかげだ。４、５枚の得意札を『絶対に取れる札』にしなさいと言われた。『感じ』が特別良くない俺はそういう札を作って、いつも位置を確認しなさいと。Ｃ、Ｄ級レベルではそういう札で相手を圧倒することが大事だと。
そして払い手はクイーンの技術だ。

実はこの技術だけはものにするまで時間がかかった。
普通に上手い払い手になるだけで、クイーンみたいに無音にならなかったのだ。
これは中学時代、バスケでも稀に起こったことだ。恐らくあまりに難易度が高いと能力のキャパシティを超え、手こずってしまうのだろう。
よって払い手がクイーンの模倣と言えるものになったのはつい先日のこと。実戦で使うのは初めてだ。

「あさぼらけ『う』」

自陣の大山札。クイーン印のきれいな囲い手で囲い、取る。
相手の動きが悪いな。さっきの取りで勢いを削げたか？

「『ふ』くからに」

そして敵陣右下段の一字決まりを抜けた。なんだか今までにないほど調子が良い。先生が励ましてくれたからだろうか。力が湧いてくる。
がんがん行こう。

◆

□日向吉彦

「負けた…うぅ…」

「あ、日向も負けたの？」

「青島さん」

会場ロビーの一角で敗戦に落ち込み、ぐいぐいと髪を引っ張っていた俺は、同じく敗退したC級の1年生、青島とばったり会った。

「まあ、しょうがないじゃん。私たち1年生だし。まだ部活始まって2ヶ月くらいでしょ？気にすること無いよ。てか、悔しがり過ぎてパーマほどけてるし。あ、山城さん。あなたも敗退？」

「うん」

「ほら、山城さんも負けたって。そう落ち込んじゃだめだよ。1年生は4人とも…あれ？滝野は？」

「滝野は勝ってるよ。というか俺、滝野に負けたんだ。しかも13枚差。だから悔しくてさ」

「…滝野ってあんたを束負けさせるほど強かったの？山城さん知ってた？」

「ううん」

◆

□滝野亮

よし、決勝戦だ。

流石に6試合目ともなると、体が疲れてくる。暗記もつらい。けど大丈夫。なぜなら女神が見てくれいてるから。

「時間です」
「難波津に　咲くやこの花　冬ごもり　今を春べと　咲くやこの花
今を春べと　咲くやこの花」

好きな人の前で無様な試合をする訳にはいかない。

◆

（滝野くん、すごくない？初心者だよね？）
（さっきから取りまくってるよ）
（ていうか、払い手静か過ぎない？）

□桜沢翠
良い調子ね、滝野くん。ちゃんと若宮クイーンと同じ取りになってる。あの別格の速さは無いにしても、決まり字ピッタリで札を取ってる。

私は自分の指導方法が間違っていなかったことにほっとする。彼のような才能を持つ人間には初めて会ったため、自分のやり方で良いものかと悩んでいたのだ。

（彼が今の1年生を引っ張っていってくれれば、バランスが良くなる。今の2年生は頼りになるけど、一つの代ばかり育てていては戦力に偏りが出る。彼と、山城さんあたりが頑張ってくれれば…）

もう1人の1年生期待の星、と共に問題児でもある山城理音のことを考える。

（『感じ』は良い。山城七段の孫なだけあって、基礎もできてる。けど熱意が無い。筋トレもランニングもサボりがち。これじゃエースにするには不安が残る。）

どうやってやる気にさせるか。そう考えていたとき、目の前に札が飛んできた。思わずキャッチする。どうやら誰かの払った札がこっちまで飛んできたようだ。

「あ、すみません女神…じゃなかった先生。ありがとうございます」

そう言って札を受け取りすぐに試合へ戻る、1年生期待の星その一。分かりやすくやる気になっている。

（彼くらい分かりやすかったら楽なんだけど…）

その分かりやすい1年生には、団体戦に向けてもっとやる気になってもらいたい。なにか良い方法はないものかと考えるのであった。

◆

□滝野亮

『『お』とにきく」

最後の札を取る。これで試合終了だ

「ありがとうございました」

「ありがとうございました」

相手はあまり悔しそうじゃない。なぜなら準優勝でもB級には上がれるから。B級は3位入賞までが昇級できる。

（まあ俺は女神の前で負けるなどあり得ないから優勝しか頭に無かったが）

随分と強気な考え方をするようになったものだ。１ヶ月前は、自分はＣ級に上がるのも難しいだろうなんて考えてたのに。変われたのは先生のおかげだ。俺は先生から誉められるのを楽しみに、表彰式に向かった。

◆

『次は、Ｃ級の表彰に移ります』
『Ｃ級優勝　富士崎かるた会　滝野亮くん。おめでとう』
　賞状を受け取る。観覧席を見ると、先生が拍手してくれてる。感無量だ。表彰式が終わると、すぐに先生のところに向かう。
「先生!!やりました!!Ｂ級です!!」
「うるさいわよ。けどおめでとう…亮」
（っ!!!!!!!!!!!!!!!）
「おっ!!滝野!凄かったな!けど次は俺も…て鼻血吹いてる!?」
「大丈夫だ日向…これはちょっと愛しさが吹き出てるだけ」
「いや吹き出てんのは鼻血だから!!ちょっ止まんねぇー!!メディーック!!」

◆

大会終了後
「えっ滝野、桜沢先生に名前で呼ばれてんの？」
「ふふん。羨ましいだろう」
　しかしこれは先生の期待に応えた俺へのご褒美なのだ。お前らは名字呼びに甘んじているが良い。

「先生、俺のことも名前で読んでください！」
「私も！」
「日向くん、青島さん？…そうね、亮だけというのも変だし、ここにいる1年生は名前呼びにしましょうか」

何…だと…？
仕切りたがりの青島がどんどん話を進めていく。

「私が桜、山城さんは理音、日向は…吉彦？」
「ちょっなんで疑問形？」
「だって吉彦って感じじゃなくない？」

確かに…という空気が漂う。かくいう俺も思った。確かに…

「じゃ、俺だけ名字呼び？やだよーそんなの」
「うーん、じゃあどうしよう…」
「ヨロシコ」

みんなが驚いて声のした方を見ると、普段あまり会話に入らない山城がいた。

「ヨロシクばっかり言う吉彦で、ヨロシコ」
「…」

それ良いーっ！山城さ…理音天才！と2、3年生も巻き込んで大盛り上がりし、日向の呼び名はヨロシコになった。日向は微妙そうな顔をしてたがすぐに受け入れたようだった。
その流れで俺たちの名前呼びも仲間内で定着した。

「なぜ1年生のあいつが名前呼びで、俺は名字呼びなんだ…」

「エロムだからじゃね？」

隅っこでメガネ先輩が落ち込んでたが、どうでもいい。

第6首　全国大会

□滝野亮

『それでは昨年の優勝校　静岡県富士崎高等学校からの優勝旗の返還です』

去年の優勝校である富士崎が優勝旗の返還と選手宣誓を行う。

「宣誓　我々選手一同は…」

主将の3年生が喋りだすがどうでもいい。

暇だから先生でも眺めていよう。ああ今日も美しい。

◆

「来たな、全国大会！」

「おう」

今日もヨロシコはテンションが高い。

7月下旬、俺たち富士崎かるた部は無事予選を勝ち抜き、近江神宮に来ていた。ここで全国の高校が鎬を削るのだ。

「にしてもビックリしたよ、亮が登録メンバーに選ばれるなんて！同じ1年生なのにすげえな！」

そう、先生は5月に言っていた通り、俺を全国大会の登録メンバーに選んだ。他に選ばれたのは3年生がA級二人、2年生がA級三人、B級二人だ。

2年生メンバーの中にはよく俺を睨んでくるメガネことエロム先輩もいる。

「まあ、予選は違うけどな」

そう、俺は予選の登録メンバーには選ばれていない。それを聞かされたとき、なぜ出してもらえないのか、俺は桜沢先生に理由を聞きに行った。

『一つは、来年に備えて2年生に経験を積ませるため。もう一つは、単にあなたの実力不足よ。まだまだ暗記や送り札といった技術が下手くそね。良くて中級者レベルよ。今のスタメンに勝ち越せるくらいでないと、試合には出せないわ』

ぐうの音も出なかった。でも先生はこうも言ってくれた。

『けど全国大会は違う。決勝戦であなたを出す予定よ。その時に向けて研鑽を続けなさい。期待してるわ』

期待してる。その言葉に突き動かされた俺は、その日からよりいっそう真剣に練習した。同じ登録メンバーのうちB級で、『富士崎のマナカナ』こと双子の2年生　鈴木真太・奏太先輩には勝ち越せるようになった。

先生は決勝と言っていたが、何かアクシデントが起きるかもしれない。いつ指名されても良いよう、気持ちの準備をしておこう。

◆

「誰あれ、むっちゃかわいかー」「あれだろ、東京代表の子だろ？」「芸能界デビューが決まっとうって話やん」「ちげーよ、姉妹がタレントなんやろ？」

部員全員で会場に入ると、なにやら人だかりができていた。そのせいで騒がしい。ついでに横にいるヨロシコも騒ぎだした。

「めっちゃかわいい子だって！亮、見てこようぜ！」
「先生以外に興味ない。さっさと行くぞ」
「歪みねえなー、お前は」

当然だ。先生に一目惚れしたあの日から、他の女子など有象無象でしかない。
それに今の俺は先生の期待に応えようと燃えに燃えているのだ。いずれ来る出場機会に備え、集中しなければいけない。

「私たちはBブロックね。さっさと移動するわよ」

先生の凛とした指示で部員全員が一斉に移動する。移動中も他校の生徒にジロジロと見られる。

（富士崎だ）（去年の優勝校）（部員めちゃめちゃ多いな）

こうして注目されると強豪校に籍を置いているんだって自覚するな。

◆

富士崎は総勝ち点トップでBブロックを突破し、決勝トーナメント一回戦でも勝利した。これから先生が一回戦のオーダーを出しに行くのだが…

「山井真琴、控えに回って」

これまで出ずっぱりだった2年でA級の3人の内1人が外された。

「先生、何で俺が…「あなた突き指してるでしょう」

「怪我してても試合に出たいという気持ちは買うわ。けど顧問として、無理をして怪我を悪化させるのは見過ごせない」
「…分かりました」

（うえ～ん、真琴センパ～イ）（しょうがないよ、怪我しちゃったら）
（ナイスガッツでした、センパイ！）

やたら女子に人気あるんだよな、あの先輩。

「スタメンには滝野亮、入って」
「はい!!!」

（やっぱ滝野か）
（1年生唯一の登録メンバー入り）
（亮スタメンだ！すげえ！）
（桜沢先生と話すときだけ声でかいよな、あいつ）

予定より早い出場だが問題ない。先生に期待されたからには絶対に勝つ。

第7首　瑞沢高校

□滝野亮

二回戦の対戦相手は東京都代表の瑞沢高校だ。

「瑞沢は唯一のA級が体調不良で棄権だそうよ。けど決して油断しないこと。強豪北央を破って全国に来たチームよ。全力でぶつかってきなさい」

『はい!!』

先生の激励に俺を含めた全員が真剣な表情になり試合に向かう。

「頑張れよ、亮!」

「ああ」

ヨロシコが声を掛けてきた。よく見ると横に理音もいる。今日も無表情だな、こいつ。

「亮、頑張って」

「おう」

珍しいな、理音が声を掛けてくるなんて。なんか顔も紅潮してた気が

「亮」

先生に呼ばれた!!!

一瞬で振り向くと、俺の反応の速さに若干引いてる先生がいた。そんな表情も素敵です。

「予定よりも早く出場させることになってしまったけど、あなたなら勝てると思ったから出したのよ。勝ってきなさい」

「っ!!!
!!はい!!!」

また先生に期待されてしまった。今の俺はやる気に満ち溢れている。絶対勝つ。

(((流石先生、滝野の扱い方を心得てる…)))

(俺と理音の時とテンションが違い過ぎない?亮…)

なんか他の部員から呆れられてる気がするが、絶対勝つ。

◆

□真島太一

次の対戦相手は富士崎高校。去年の優勝校だ。

「一回戦の富士崎のオーダー見てきたよ。3年生のA級二人と2年生のA級3人がスタメンで、控え3人はB級だ」

駒野がこの短い時間で調べてきてくれたようだ。A級5人か…厳しいな。西田や大江さんも萎縮してる。

「全員A級!?どうすりゃ良いんだよ、それ」

「勝てるでしょうか…」

正直俺も望みは薄いと思う。けど…

「けど、諦めるわけにはいかない。千早に少しでも良い結果を持って帰ろう」

そう言うと3人とも覚悟を決めた表情で頷く。4人で円陣を組む。

「「「み　ず　さ　わ　ファイッ!!」」」

◆

富士崎高校のスタメンが入場してくる。それにしても凄い応援の人数だな。こいつら全員部員なのか。流石強豪校。
スタメンはこの人数の上に立ってるんだもんな。そりゃ強い筈…って、1人明らかに1年生が混じってるぞ!?
駒野の方をチラッと見ると、傍目にも驚いてるのが分かる。あいつにとっても予想外の出来事らしい。
なんにせよチャンスだ。A級の上級生よりはB級の1年生の方がいい。ほぼ0だった勝ち目が少しだけ見えてきた。

「オーダーを読み上げます」
「富士崎高校　江室凌雅」「瑞沢高校　駒野勉」
「富士崎高校　市村充輝」「瑞沢高校　大江奏」
「富士崎高校　滝野亮』」「瑞沢高校　真島太一」
「富士崎高校…

しかも俺との対戦だ。同級で同級生なら十分勝機はある。

□駒野勉
あの1年生は真島と対戦か。まさか二回戦でスタメンを変えてきてしかもそれが1年生だなんて。
富士崎が毎年決勝戦で下級生を入れるっていうのは割と有名な話だから、それまでは変えずに来ると思っていた。
うちを舐めてるのか?それとも何かトラブルか?怪我か体調不良か…
体調不良。綾瀬が体調不良で棄権したときは驚いたし、心細くなった。けどだからこそ綾瀬のために勝たなきゃならない。
真島と肉まんくんが勝つのは勿論、僕かかなちゃんのどちらかが勝たないと3勝できないんだ。僕は勝つ気でやるぞ。

□滝野亮

「暗記時間は今から３０分までです。始めてください」
暗記時間が始まると同時に俺以外の富士崎のスタメンが席を立つ。富士崎伝統の暗記時間中のストレッチだ。連戦すると前の試合の暗記が頭に残るので、札を『覚えすぎる』ことを防ぐため席を立つ。数試合して脳が消耗してくると富士崎がやる常套手段だ。３年生の内１人は既に不戦勝なので、そのまま観覧席に移動しているが。
けど俺は今日初試合。その必要はないので暗記に集中できる。

それにしても瑞沢は全員袴なんだな。珍しい。動きにくそうだけど大丈夫なんだろうか。
袴、袴か。もし先生が袴着たら綺麗なんだろうな。先生の袴姿……
（っ!!!!!!!!!!!!）
頭に思い浮かべた姿のあまりの神々しさに愛（鼻血）が吹き出でそうになるが、必死で抑える。あんまり出血すると審判に棄権させられるかもしれない。先生に期待された以上、それはできない。必死で隠す。
それでも数人にはバレたようだ。ヨロシコの顔が真っ青になっているし、理音は相変わらずの無表情だが雰囲気が慌てている。対戦相手のイケメンも気づいたっぽい。先生は…変わらない。いつも通りの先生だ。ただ俺のことをじっと見ている。
先生に見られてるのに不戦敗なんて不甲斐ないことできるかよ。暗記に集中だ。

◆

「時間です」
「難波津に　咲くやこの花　冬ごもり　今を春べと咲くやこの花」

取る。最初の一枚。

「今を春べと咲くやこの花」

「ゆ『ふ』されば」

□真島太一

取った！しかも相手がお手つきした！ダブだ！

というか、なんだこいつの払い手？札際ギリギリをキレイに払って、しかも全く音がしなかった。こんな取りができるやつが1年生？経験者なのか？

けどこんな序盤でお手つきってことはやっぱ初心者なのか？分からない。なんか暗記時間中に鼻血出てたっぽいし、こいついろいろ謎過ぎるぞ。

第8首　決着

□滝野亮

いきなりダブったが問題ない。俺のかるたが模倣した部分以外へボなのは重々承知だ。それでも真太先輩と奏太先輩には勝てた。なぜかというと、

「よのなか『は』」

こういう四・五・六字決まりには『囲い手』が生きるからだ。囲い手は身体的な技術。つまり模倣できる。クイーンは囲い手も上手いからな。しかも男の俺のほうが手が大きいから、より鉄壁になっている。

しかもそれだけじゃない。

「きみがため『を』」

大山札（六字決まり）。俺は自陣の「きみがためは」を囲い、相手のイケメンは自陣の「きみがためを」を囲った。そのまま行けばイケメンの取りだけど俺が『囲い手破り』で先に取った。

これもクイーンの技だ。相手の囲い手を掻い潜り先に当たり札を取る。

囲い手も囲い手破りも本来は高度な技だ。本来は俺のようなかるた歴3ヶ月の初心者にできることじゃない。形だけできてもこれほど上手くはとても無理だ。

敵はさっきのダブと今の取りを比べて混乱していることだろう。こいつは上手いのか下手なのか、と。できればそのまま混乱しててくれ。

試合が進めば決まり字は変化し一字・二字決まりが増え、囲い手で取れる札はどんどん少なくなる。できれば序盤に枚数を稼ぎそのまま勝ち逃げしたい。

「なには『が』た」

□真島太一

また囲われた！こいつの囲い手とんでもなく低い。とても抜ける気がしない。

いきなり初心者丸出しのダブをしたと思ったらこの上手い囲い手、さらに囲い手破り。そのくせさっき俺が送った友札は分けてない。こいつの実力が測れない。

そんなことを考えている間にもどんどん枚数差が増える。このままじゃ負ける…？いや、まだまだ。

「あき『か』ぜに」

取った！しかも相手は「あきの」払った！あんなキレイな払い方のくせにまたダブ。暗記が甘いのは間違いない。

「富士崎２勝!!」

（やった！）（エロム先輩！）

駒野が負けた。これでもう1敗もできなくなった。

しかし場の枚数が減ってきて、決まり字はどんどん短くなっている。囲い手はもう怖くない。勝てるかもしれない。いや、勝つ。

□滝野亮

ぬぐぐ、またダブった。先生が呆れてるのが分かる。しかもエロム先輩に先越された。

今は俺が三枚差で勝っている。けどほとんどの札が一字・二字決まりになった。もう囲い手は使えない。

現時点で俺の最大の武器がクイーンの囲い手なのは間違いないが

それだけじゃない。クイーンの払い手がある。あの札際に厳しい取り方は『感じ』が特別優れていなくても、相手よりも札を取り易い。
それに札の枚数が少ない終盤は俺もお手つきをしにくい。ましてや相手は予選も戦ってきていて消耗している。対する俺は今日が初戦だ。

「た『ご』のうらに」

よし、取った。相手が遅い取りをしたところを拾った。一瞬別の場所に反応してたな。前の試合の暗記が残っているんだろう。
自陣は後一枚になった。

（くそ、ミスった。今のが取れてれば）

相手が一生懸命なのが伝わってくる。

（まだ勝ち目はある。ここから連取するんだ）

きっと喜ばせたい人がいるんだろう。

（勝って千早を喜ばしてやる）

もしかしたらそれは好きな人かもしれないな。だとしたら俺と同じだ。
ただ、俺の愛の方がずっと強い。

「『た』きのおとは」

「…ありがとうございました」
「ありがとうございました」

それだけは断言できる。

「富士崎３勝!!」

◆

瑞沢に全勝し二回戦を突破した富士崎は、その後も順調に勝ち進み優勝。５連覇を達成した。

喜びを分かち合う５０人の部員たち。俺も他の１年生たちに誉められた。

「すげーよ亮！」「やるな滝野！」「イケメンの無駄づかい！」「ダブ王子！」

いや貶されてた？なんにせよ優勝は嬉しい。ちょいちょい、とつつかれた方を見ると理音がいた。

「やったね、亮」

「おう」

能面みたいな表情で祝福されるのは変な気分だな。なぜか自分から話しかけてくるようになったし。まあコミュニケーションをとるのは良いことだ。

浮かれていた部員たちの視線が一点に集中する。先生が話をするのだ。

「団体戦優勝おめでとう。この結果はあなたたちが厳しい練習を乗り越えたからこそ掴んだ成果よ。誇りなさい」

「けどこれで終わりじゃない。まだ明日の個人戦があるわ。喜ぶのもほどほどにして体を休めなさい」

『はい!!』
「じゃ、ホテルに移動するわよ」
『はい!!』

（流石桜沢先生…優勝してもクール）（いつも通りの表情だったな）
（過去の４連覇でも笑わなかったらしいよ）（まじ？）

みんな先生の冷静さに驚いてるな。けど俺には分かる。今の先生はめちゃくちゃ機嫌が良い。ただ表情に出てないだけ。そんなところも愛おしい。

第9首　課題発見

□桜沢翠

昨日の団体戦では思っていた以上の収穫があった。

まずは2年生の頼もしさ。江室くんを始めとしてこれからの富士崎を背負っていけるであろう優秀なメンバー。この世代は安泰ね。

それから1年生の注目株・滝野亮の成長。昨日の団体戦では二回戦で勝利した後、スタミナ次第で真太か奏太と変えることも考えていた。

けどまだ余裕がありそうだったし、何より本人が二回戦で気持ちで押す良いかるたをしていた。なのでそのままやらせてみると、準決勝・決勝と立て続けに勝ってしまったのだ。しかも決勝の相手はA級だった。

模倣した技術以外下手くそなのは相変わらずだけど、あの熱意があればまだまだ伸びる。彼が1年生の絶対的エースになってくれそうだ。個人戦でももしかするかもしれない。

◆

A級の会場で勝ち上がった生徒の二回戦を見ていると、亮がやってきて隣に座った。不戦勝になったのかと聞くとけろりとした顔で答えた。

「いえ、一回戦で負けました」

「…相手が強かったの？」

「昨日の決勝の対戦相手の方が強かったんじゃないですかね。あの時はA級が相手でしたし」

ますます分からない。なんで負けたのかもそうだし、そもそもなぜそんなにあっさりとしているのか？

「昨日の負けん気はどうしたの？」

そう聞くと彼はこう答えた。

「うーん、今日はそういうのはなかったですね。先生に期待してるとか勝てとか言われませんでしたし」

言葉がなかった。敗戦の言い訳ではなく、本心からそう思っていることが分かった。

私は彼のかるたに対する姿勢に決定的な問題があることに気づいた。

不純代表みたいな江室くんでさえ、目の前の試合には勝ちにいこうとする情熱がある。けど彼にはそれがない。

私が期待していると言えばその期待に応えようとし、勝てと言えば勝とうとする。それだけだ。そういえば今まで彼が活躍した試合の前には必ず激励したり目標を与えたりしていた。単に扱い易いだけだと思っていたけどそうじゃなかった。

一言で言えば、彼はかるたが好きじゃない。

入部したばかりの彼が言っていた言葉を思い出す。

『俺は先生が好きなんです!!先生に少しでも近づくためにかるた部に入ったんです!!』

もし私がＡ級になれと言えば彼は必死にＡ級を目指すだろう。名人になれと言えば本気で名人を目指すだろう。

けどそれではだめだ。それは彼がかるたに熱中していることにはならない。ただ私の指示を達成することに熱中しているだけだ。そんな方法で得た強さを私は受け入れられない。

彼にかるたそのものに対して情熱を持ってもらわねばならない。

私ではなく『かるたを』好きになってもらうことを目指さねば。
それがかるた部顧問としての、一人のかるたを愛する者としての義務だ。

□滝野亮
先生どうしたんだろう?俺に質問してからずっと黙り込んだままだ。
何か考えてるのかな。真剣な顔をしている。　そんな表情も魅力的だ。

◆

先生の表情を十分に堪能した後若宮詩暢の試合を見た。俺がさんざん技をパクった相手だ。二試合ほど見たが、特に学べることはなかった。強いて言えば模倣するために見た映像よりちょっとだけ手の軌道が速くて低くなっていたので、それだけ模倣し直したが。
その後はヨロシコに誘われてB級決勝に勝ち進んだ3年生の先輩の応援に行った。対戦相手は昨日俺が戦った瑞沢のイケメンだ。
イケメンも頑張ってるけどうちの先輩が勝ちそうだな。富士崎らしくスタミナがある先輩は、決勝戦でもまだ余裕がある。イケメンはへろへろだ。

結局俺の予想通りの結果で試合は終わり、高校選手権も終わった。

帰りのバスの中でこの二日間のことを思い出す。なかなか充実した時間を過ごせた。頭の中で二日間のハイライトが流れ出す。
大声で部員に移動指示を出す先生。
運営のスタッフさんに声をかける先生。
近江神宮の熱気に汗ばむ先生。
木陰で一息つく先生。

うちわで自分の顔を扇ぐ先生。
自販機で買ったコーラをガブ飲みする先生。
他にも数えきれないほどの先生が俺の記憶に残っている。いやあ、
高校選手権って最高だな。

第１０首　合宿

□滝野亮

高校選手権が終わってすぐ、富士崎かるた部夏の合宿が始まった。一泊二日で試合形式の練習が中心のメニューだ。

今日は階級関係なく午前２試合・ランニングストレッチ昼食を挟んで午後３試合・ランニングストレッチ夕食を挟んで夜２試合だ。

他の１年生は練習のハードさにビックリしていたが、俺としては先生といられる時間が増える合宿に文句などない。他の奴らもキツいと言いながらサボる奴はいない。みんな先生を尊敬しているのだ。

唯一気がかりなのは高校選手権あたりから先生の様子がおかしいことだ。他の部員は気づいていないみたいだが、先生研究家である俺の目は誤魔化せない。何かあったのだろうか。

◆

一日目の練習は何事もなく終了した。今日の戦績は５勝２敗。２敗はＡ級の先輩につけられた。他には勝ったから自分としては満足できる結果だ。まあ先生に勝てと言われたらなんとしてでも全勝するが。

「疲れたー、もう札見たくねー。あ、亮いた。寄宿舎に布団敷いてから銭湯行こうぜ。汗で体ベトベトだ」

「わかった」

富士崎にはこういう合宿で使うために寄宿舎がある。そして近くには銭湯があり、風呂はそこで済ますのだ。

「泊まり楽しみだなー！恋バナしようぜ！」

「任せろ。先生の魅力を朝まで語ってやろう」

「よしお前には喋らせない」

さあ寄宿舎に向かおうというところで先生に声を掛けられる。

「亮、ちょっと残ってくれる？」

「仰せのままに!!!」

ヨロシコを先に行かせ先生についていき、武道館の教員室に入る。先生に呼び出されたのはこれで3回目だ。これはもう付き合ってると言っても過言ではないだろう。

「あなたにこれを見てもらおうと思って」

そう言って先生は鞄から一つのビデオを取り出した。それをビデオデッキに差し込む。古い映像のようだ。

『滋賀県近江神宮から生中継でお送りします名人・クイーン戦…』

ナレーションが流れる。

「先生これは？」

「私が現役の時の映像よ」

□桜沢翠

あの高校選手権の日からずっと考えていた。彼に情熱を与えるにはどうすれば良いのか。そもそもここまで情熱のない生徒なんて初めてで、悩みに悩んだ。

なんとかして動機を与えたい。かるたで勝ちたいという動機を、私のため以外に。

考えた結果がこれだ。この映像は私が猪熊さんに挑戦した四度目のクイーン戦。彼女に四度挑戦した中で最も良い勝負ができた試合だ。当時ＢＳで放送されたものを録画してダビングした。

私にとってもベストゲームであるこの試合を見せて、少しでもやる気を出してもらいたい。そんな思いでわざわざ自宅から持ってきたビデオだ。

『ここで選手の紹介です。挑戦者は桜沢翠六段。今回で五度目のクイーン位への挑戦です。最強の挑戦者が今年も近江神宮にやってきました』

そう五度目。このとき既に膝と腰を痛めていて、この試合の後現役を引退し富士崎の顧問になった。つまり現役最後の試合だ。

全部見せては深夜になってしまうので、飛ばして3試合目から見せる。

『一戦目を終えた時点で猪熊クイーンに黒星をつけられた桜沢六段。しかしそこから一勝。勝負は最終戦まで持ち越されました』

三戦目まで持ち越せたのはこの回だけだった。体のこともあり今年で引退を覚悟していた私は、なんとしても勝ちたかった。今までにない気合いで臨んだところ、一勝をもぎ取ることができたのには自分でも驚きだった。

『桜沢六段取りました！』

『思いきった取りです、珍しいですね』

『負けじと取り返す猪熊クイーン！流石の反応の良さです！』

◆

『決まった！決まりました！猪熊遥クイーン位防衛！これで４連覇です！連勝記録はどこまで伸びるのか!?』

当時の私が泣いている。全てを賭けてそれでも勝てなくて、本当に

悔しかった。
誰もが彼女の強さを疑わなかった。そんな彼女に食い下がり五戦目まで戦えたことは、今でも私の誇りだ。
あのときの私は間違いなくそれまでで最高のかるたを取っていた。
さて亮、あなたは何か感じた？私と猪熊さんの試合の試合を見て何かを得てくれた？
「どうだった？亮」
「ぐすっ、うぅ…うぅうぅぅ」
な、泣いてる？なんで？
「どうしたの？」
「先生が…若い頃の先生が…美し過ぎて…」
「そ、そう…」
分からない。なぜそれで泣くのか全然分からない。
「か、かるたは？試合について何か気になったことはあった？」
「先生上手でした」
「ありがとう。けどそうじゃなくて、感じ入るものとか響くものとか無かった？」
「……いえ、それだけです」
駄目か。顔には出さないけど落胆してしまう。やけに返答までに間があったのは気になるが。どうすれば彼を変えられるのかしら。
「あ、そうだ。あの対戦相手の猪熊さんって人、まだ現役なんですか？」

「いえ、彼女はこの試合の後産休に入ったわ。産んだ二年後に二人目を妊娠して、その子は一昨年産まれたそうよ。どうして？」
「そうですか。いえ、何でもないです」
なんだろう。私の次は猪熊さんに告白するつもりかしら。いや今はそんなことはどうでも良い。この方法でも駄目だとすればどうやって…
教員室を出ていく彼はやけに落ち込んでいた。

◆

翌日の練習。まずは裏山で可能な限り走らせながら登山をさせた。これから午前に1試合、午後に3試合を行って合宿は終了となる。
「昨日は実力関係なく当てていきましたが今日は私が対戦表を作ってきました。3試合目までを貼り出します」
生徒たちが対戦表の前に集まる。
「4試合目はそれまでの結果を見て決めます。見たら番号の席に着いて…」
指示を出しながら昨日のことを思い出す。あの後亮を帰らせ一人で考えていたが、結局彼にやる気を出させる方法は思い付かなかった。
今日の彼の対戦相手は全員B級で統一している。団体戦ではA級相手に勝利した彼だけど、あの時の気持ちの強さがなければB級相手でちょうど良いだろう。

◆

…何が起こったの？

『『う』かりける」

また取った。さっきから亮が圧倒している。実力的には大差ないはずの奏太相手に。

よく見るとところどころ私の動きにそっくりだ。攻守の切り替えが滑らかになっている。そこにクイーンの取り方が合わさることで明らかに強くなっている。昨日見せた映像から模倣したのだろう。

けど何よりかるたが戻っている。ものすごい熱量を持っていた団体戦の時のかるたに。

何があったの？昨日私があんなにやる気を出させようとしても駄目だったのに。

何がなんだか分からないけど今の彼は強い。４試合目はＡ級と対戦させてみましょうか。

□滝野亮

３試合目まで全勝し、４試合目の対戦表を見る。俺の相手はエロム先輩だ。先輩の方を見ると目が合った。あ、睨んできた。相変わらず嫌われてるな。

先生に新部長に指名されるだけあって先輩は強い。今の富士崎で一番強いだろう。けど負けるつもりはない。意地でも勝ってやる。

◆

先生の現役時代の映像を見た俺は教員室を出て、一度寄宿舎に荷物を置いてから銭湯に向かった。もう他の奴らは入り終わって帰っていったらしい。ガラガラに空いている浴場で練習の汗を洗い流す。

先生に見せてもらった映像は、俺にとって衝撃だった。

全力でクイーンに挑む先生の姿は俺の知っている富士崎かるた部

顧問としての先生じゃなかった。一人の選手として戦い、悔し涙を流していた。
今とはまた違った美しさ。現役時代の先生は燦然と輝いていた。あまりの美しさに感動して泣いてしまった。

だからこそ不安になった。あんなにかるたに一生懸命になれる先生に今の俺は相応しいのか。
問題は、俺が先生よりも弱いこと。
まず自分が、好きな女性より弱いというのが嫌だ。
それに先生は世界一魅力的な女性だ。俺よりかるたが強い男が先生のことを好きになっても不思議ではない。
そして今の俺ではそいつに太刀打ちできない。
愛を伝えるだけじゃ駄目だ。行動で示さなければ誰かに横取りされてしまう。

俺は先生に相応しい男になる。あの映像を見て、それはかるたが強い男であると確信した。だから俺は先生よりかるたで強くなる。他の男に先生を奪われないためにも。
最初は先生が倒せなかった猪熊さんを倒すことを目標にしようと考えたが、産休で何年も休んでいるなら当時の強さではないだろう。そんな人に勝てたって先生を越えた証明にはならない。
当然現役を引退した今の先生に勝つだけでもだめだ。最盛期の、準クイーンだったころの先生を越える。つまりクイーンになる。いや男だから名人か。

「俺は名人になる」

それが先生よりも強いことを証明する方法。
そうして桜沢翠先生に相応しい男になり、彼女に告白する。

誰も居ない浴場に俺の決意が響いた。

【寄宿舎・1年女子部屋】
『私、戸田先輩かな～』
『私は断然真琴先輩！』
『あ～分かる』

女子たちは合宿の定番・恋バナに勤しんでいた。すると一人の女子が会話に参加していない者を見つける。

『山城さんは？好きな人いないの？』

数人が理音に注目する。といっても無表情でおとなしい理音に浮いた話は期待していなかった。声を掛けた女子もただ話の輪に加えようと思っただけだ。

「えっ…！」

しかし予想に反して顔を真っ赤にする理音。その反応に他の女子はテンションを上げる。

『いるの!?』『だれだれ!?』
「い、いない…」
『うっそだあ～！』
『山城さんの近くの男子ってヨロシコか…滝野？』

二人目の名前を出したところでさらに顔を紅潮させる理音。その反応にまたしても女子たちのテンションが上がる。

『けど滝野は厳しくない？あいつ桜沢先生ラブじゃん』

一人の女子の言葉にあ～、と同意の空気が生まれる。しかし理音は小さな声で呟く。それでも好きなの、と。

理音としては誰にも聞こえない音量で呟いたつもりだったが、試合以上の『感じ』の良さを発揮した女子たちによって聞き取られていた。

『一途!!』『たまらん!!』

『『『なんだこのかわいい生き物は!!!』』』

こうして1年生女子の間で「山城さんの恋を応援する会」が誕生した。

第11首　強化

□滝野亮

どうすれば強くなれる？

練習終了後、俺は一人悩んでいた。合宿二日目のエロム先輩との対戦、名人になると意気込んで臨んだは良いが結果は5枚差で負け。

何が悪かったかと考えると暗記とか体力とかいろいろ思いつくが、一番は武器の少なさ。現状使えるのが若宮クイーンと先生の技のみ、これは少な過ぎる。

本来俺の能力はいろんな人の技術を組み合わせることで真価を発揮する。もっと技のバリエーションを増やさなければならない。

そのためには技を模倣する対象を見つけねば。どうすればそんな人が見つかるのか。

エロム先輩は今の俺よりは強いが、特に際立った技術がある訳ではない。強いていえばフワッと体を出してから札を見つけて取るという特徴があるが、それは決まり字まで手元で聞いてから飛び出す若宮クイーンの取り方とは対極的だ。

他に強い人…先生のライバルの猪熊さん？けどあの人の一番の強さは恐らく『感じ』の良さだ。「ちは」とかとんでもない速さで取ってたし。感じの良さは模倣できない。

けど全く札を寄せず札直で取るあの特徴的な配置のかるたは使えるかもしれない。配置を真似するのではなく、札直で取る技術のみ模倣する。配置は練習して体に叩き込まなければ意味がないって先生が言ってたしな。

そうと決まれば先生に頼みにいこう。

「え、あのビデオをもう一度見せて欲しい？ごめんなさい。もう持って帰ってしまったわ。それにどうして…ああ、模倣するのね。分かった、もう一度持ってくる」

ついでに俺の役に立ちそうな強い選手に心当たりがないか聞いてみる。

「…あなたの役に立つかは分からないけど、強い選手なら知ってるわ。綿谷始永世名人。かつて七連覇を果たした名選手。私の世代のヒーローよ」

「綿谷始…その人の映像はありますか？」

「私は持ってないけど、心当たりがあるわ。ちょっと待ってて」

そういうと先生は電話を掛け始めた。

「栗山先生？ご無沙汰しております。ちょっとお願いしたいことが…」

誰かと話し始めてしまった。よく分からないが映像は手に入るらしい。流石先生は頼りになる。

そうと決まれば俺は自分の練習をするしかない。

「ヨロシコ、試合するぞ」

「ええ、俺もう帰るとこだったんだけど。最近急にやる気出し始めたよな、エロム先輩に負けたのがそんなに悔しかったのか？」

「まあそれもあるけど。それだけじゃなくて俺には目標ができたんだよ。とにかくやるぞ！」

「え、ちょっと待って。今日は本当に無理なんだって。勘弁してくれ」

くそ、ヨロシコは駄目か。他に試合できそうな奴は…

「私とやろう、亮」

「理音？」

「私は暇だから。いくらでも相手できるよ」

そりゃ助かる。理音は1年生じゃ俺の次に強いからな。『感じ』が良い相手と戦えるのも嬉しい。それにしても相変わらず無表情な奴だ。

他の1年生女子たちがキャアキャア騒いでるのが気になるが。

◆

数日後、俺は先生が持ってきてくれた映像を見ていた。猪熊さんの札直の取りは無事模倣できたので、そのあと綿谷始さんの映像を見た。名人の凄さを思い知らされた気分だ。

「綿谷永世名人の強みは『感じ』の良さではなく技術よ。イヤな配置にイヤな送り札、札を払うスピードが手元から急に速くなる超加速。あなたが模倣できない部分が強かった」

その通りだ。俺は頭を使う技術やあの超加速を模倣できない。あれは永世名人の経験と筋肉が可能にしている技術だ。けど役に立つところもある。そこまで巻き戻してもう一度見る。

『なにわ『え』の』

『出ました、渡り手！綿谷名人の十八番！』

この渡り手。綺麗で滑らかな流れるような取り方だ。これは使える。この技があれば『感じ』の良い奴とも対等に取れる。もっと強くなれる。

「先生俺は一月後…9月下旬にある埼玉大会で、A級になります」

初めて自分から言った目標に、先生の口角が吊り上がる。そんな笑顔も美しい。

「期待してるわ」

第１２首　成果

□滝野亮

俺はかるた大会に出場するため埼玉に来ていた。

この大会は静岡からは遠いため、富士崎から出場するのは俺だけだ。当然先生もいない。他の部員の練習があるからだ。

以前の俺ならやる気２００％減だが、俺は先生に相応しい男になると決めたのだ。一月後には名人位・クイーン位挑戦者決定東日本予選大会がある。この大会はＡ級しか参加資格がないため、一月後までにＡ級にならなくてはいけない。

組み合わせを見て番号の席に向かう。一回戦の相手はやたら細くてパッツンヘアーの男だ。

真っ赤なＴシャツには大きく北央とプリントしてある。北央学園って確か…

「東京予選で瑞沢に負けたとこ？」

相手の細いやつが反応する。見るからに怒ってるのが分かる。

「初対面で失礼なやつだな！それに北央学園は瑞沢より強い！試合で教えてやるよ！」

怒らせてしまった。まあ良い。新しい技をちゃんとした試合で使うのは初めてだ。どれだけ通用するか確かめさせてもらおう。

◆

「『あ』りまやま」

「ありがとうございました」

「…ありがとうございました」

あっさり勝った。十五枚差もつけて。正直物足りない相手だった。これならC級の理音のほうが歯応えがある。まああいつは読手によって速さが全然違うから一概に強いとは言えないが。とにかく良い滑り出しだ。

落ち込む細いやつを尻目に次の試合に向かう。次の相手は真島太一…瑞沢のイケメンじゃないか。埼玉の大会なだけあって東京の選手が多いな。まあ一度勝った相手と戦えるのは嬉しい。今日はくじ運が良いな。

◆

□真島太一

よし、勝った。名人戦予選は来月。この大会が昇級の最後のチャンスかもしれない。この調子で勝つ。

二回戦の組み合わせが終わったようだ。俺の相手…滝野？もしかして団体戦で戦った富士崎の1年か？まさか埼玉の大会に出てくるとは驚きだ。

夏の大会じゃあいつに負けたが、結果は三枚差だ。あいつは何度もダブルしてたし、十分勝機はある。

滝野の戦績を見る。ヒョロ相手に十五枚差!?嘘だろ？ヒョロの実力は俺とそう変わらない。滝野が夏の実力のままならこんなに差がつくことはない筈だ。どうなっている？

俺は不穏に感じながら試合に向かった。

◆

「ちぎり『お』きし」

また渡られた！自陣右下段から自陣左上段にかけて流れるような渡り手。
こんなの団体戦じゃ全く見なかった。この二ヶ月で身に付けたっていうのか？
それだけじゃない。団体戦でも見たこいつの払い手、どっかで見たことがあると思ったら、若宮詩暢に似てるんだ。似てるっていうか若宮詩暢そのものだ。どんな手品を使ってるんだ？
とにかくこのままじゃ不味い。相手は武器が増えてるのに加えて送り札や友札の分け方も地味に上手くなってる。お手つきも夏ほどではなくなっていて付け入る隙がない。どうにかしないと、どうにか……

◆

□滝野亮
この試合も問題なく勝てた。一回戦よりは苦戦したが結果は十二枚差。上出来だ。瑞沢のイケメンが悔しがっている。こいつもこの大会に賭けてたのかもな。

◆

□綾瀬千早
金井さんに一回戦負けした私は、A級からD級までの決勝戦を行う会場の観覧席に来ていた。それにしてもどうしよう？まさかB級の決勝に肉まんくんが、D級の決勝にかなちゃんと机くんが出てるなんて。両方見ようと頑張ったけど無理だ。こんがらがる。どっちをを見ればいいのか分かんないよ。
私が悩んでると太一が横に座った。
「あっ、太一どうしよう！肉まんくんの方もかなちゃんたちの方も見たいんだけ「千早」

「西田の方を見てろ」

太一が即答したことに驚いて、思わず反論する。

「で、でもかなちゃんと机くんの試合も大事でしょ？」

「西田の対戦相手のあいつ。あいつが戦うところを見ておいた方がいい」

「？」

肉まんくんの相手…何でだろ？取り敢えず読手が読み始めるので静かにして、太一の言うとおりにしてみる。

「た『ま』のおよ」

わっすごい！キレイな渡り手。私あんなの絶対できない。

「あれのこと？見た方がいいって」

「違う」

太一の目が対戦相手の人の手元から離れない。すごく真剣な表情だ。

「『す』みのえの」

……えっ!?

「こ『ぬ』ひとを」

何で？何であの人…詩暢ちゃんと同じ払い手ができるの？

◆

「ありがとうございました」
「ありがとうございました」

試合が終わった。肉まんくんが十一枚差で負けたとか、まだかなちゃんと机くんの試合が終わってないからそれを見なきゃとか、色々思い浮かぶけど今はどうでもよくなってしまった。
あの人に聞きたい。あの音のしないかるたの秘密を教えてもらいたい。その一心で会場から出て行った肉まんくんの対戦相手を追いかける。

「あのっ、すみません！」
「はい？」
「えっと、その…」

ど、どうしよう。何て聞けば良い？『その払い方どうやって身に付けたの？』それとも『やり方教えて』かな？ともっていると目の前の人はどんどん怪訝な顔になる。と、突然顔色が変わった。

□滝野亮
「先生!!」
「大きな声を出さない。まだ他の級の人は試合中でしょう？」
「な、何でいるんですか？」

何故か先生が目の前にいる。俺は大会があるから休んだが富士崎は今日も練習の筈だ。

「練習が早く終わったから見に来たのよ」
「…俺のためだけに？」

信じられない。なんでわざわざ…

「A級になるって宣言してたから見ておこうと思って。けど一足遅かったみたいね。念のために聞くけど勝ったの？負けたの？」

試合が早く終わるということは大勝したか大敗したかのどちらかだ。

「勝ちました」

誇らしげに結果を告げた。すると先生がにっこりと微笑んだ。

……微笑んだ？

「よくやったわね」

先生が笑った。全国大会で優勝しても笑わなかった先生が。

厳密に言えば一月前にも見たか。けどこんなに優しい笑顔は初めてだ。まるで天使…聖母…ああ召されそう…。

「かるたを初めて半年足らずでA級なんて滅多にないことよ。本当に…亮!?」

おっと愛が吹き出てしまった。というか止まらない。先生が慌てている。なかなかレアな表情だ。しっかりと脳内メモリーに保存せねば。

第13首　相談

□桜沢翠

「原田って人に勝ちたいんですけどどうすれば良いですかね」

「いきなりどうしたの」

7月上旬、部員への指導が終わり帰ろうとしていた私に亮が声を掛けてきた。

「俺昨日の吉野大会出たんですけど……」

「ああ、部の練習休んで行ってたわね。最近熱心じゃない、あなた」

「ありがとうございます。ってそうじゃなくて、そこで原田さんに負けちゃったんです」

「原田さん？白波会の？」

原田秀雄六段。東京で白波会というかるた会をやってらっしゃるかるた選手。もう五十代も半ばに差し掛かった年齢にも関わらず、選手として大会に出てくることでも有名な人だ。その熱意は誰もが認めるところだ。

「まあA級に上がったばかりじゃ厳しいんじゃない？ましてや原田さんが相手じゃ」

名人になると言って憚らない原田さんは、どんな試合でも手を抜かない。名人戦予選の調整として出ているであろう吉野大会なら尚更だ。

「でもあの人に勝てなきゃ、挑戦者になれないじゃないですか」

「……あなた名人になりたいの？」

「はい」

驚いた。確かにうちはかるたの強豪校だけど、目指すのはあくまで団体戦での勝利だ。本気で名人・クイーンを目指すような部員は滅多にいない。

受験がない二年生以下のＡ級の部員は予選に参加させるが、あくまで経験を積ませることが目的だ。

けどそれなら彼の頻繁な大会への参加も理解できる。名人戦予選を見据えて経験を積んでいたということね。

「厳しいことを言うようだけど、今の亮では難しいと思うわ。あなたの成長の早さは素晴らしいけど、圧倒的に経験が足りない。現時点で模倣した部分以外はようやく初心者レベルを抜け出したくらいの技量よ。そして名人戦予選まではあと二週間ちょっと。今から急激なスキルアップは望めない」

「それでも勝ちたいんです」

私がこれだけ言っても諦めない。まあこの教え子の頑固さは入部したときから知っているが。

本人がそこまでいうなら、顧問として手助けせねばならない。二週間で出来ることをやろう。

◆

□滝野亮

名人戦・クイーン戦予選当日、俺は他の予選参加者と一緒に大会会場に来ていた。俺以外にはエロム先輩、市村先輩、真琴先輩の三人がいる。全員男のため名人戦への参加だ。

今日も先生は他の部員の練習があるため、ここにはいない。けど午前中で練習が終わるため、午後から見に来れると言ってくれた。それまで勝ち残っていればの話だが。

ここでの勝利が先生へのプロポーズへ繋がっているのだ。誰が来ようと負けるつもりはない。